



Title	The Eve of St. Agnes' : その背景と意義
Author(s)	佐藤, 芳子
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 56-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25811
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

‘The Eve of St. Agnes’ —— その背景と意義 ——

佐藤 芳子

(1)

Sir Sidney Colvin は ‘The Eve of St. Agnes’ を評して、次のように云っています。

‘ . . . that unsurpassed example _____, nay, must we not rather call it unequalled? _____ of the pure charm of coloured and romantic narrative in English Verse.’ (1)

この言葉に代表される如く、この作品は、従来そのあまりにも Keats 的な美しさのみが高く評価され、詩人の精神的な発展の上からみた意義、又、Keats の詩全体の流れの中にあるこの詩の占める重要性については、見落されているように思われます。たしかに、この詩は Keats の詩作中その美しさと、完成度において、傑出していますが、この詩の書かれた背景を考えてみれば、この詩が当時の Keats の精神状態を考えないで理解のできる、単に詩人の Fanny Brawne に対する恋の理想的実現をうたった、若々しい感情にあふれた romance でない事は明らかであります。それどころか、この詩は、多くの点で、Keats の未来の詩の方向を最もよく示した作品であり、その意味で、断片に終わった ‘The Fall of Hyperion’ と共に、いやそれ以上に注目すべき作品であります。

Keats はその短い生涯を通して、シェークスピアの如き、苦しくも力強い人間の心の詩人として、真に偉大な詩人の列に列つせんという大望を持ちながらも、詩によって社会に対して何かをなしたいという自己脱皮的な現実^①に密着した理性的本能と、逆に、孤独の中で、自己の想像の創り出す理想の世界にひたりたいという逃避的で内向的な傾向とに苦しみ、晩年は、ややもすれば内的な意欲の高まりとは逆に、病弱も相まって indolence を楽しんでいた感が多分にありました。又、Keats はそのあまり

にも高い美の理念と、社会に於ける自身の不安定な立場から、Mass としての現実の人間に対して嫌悪の念を深めていましたが、この傾向は、'18 年秋、彼の詩の中核を含む 'Endymion' が、*The Quarterly Review* と *Blackwoods' Magazine* 両誌により酷評されて以来、ますます悪化し、この事は詩人の人道的な大望を根本から損い、その苦しみを無意味にしていました。'Endymion' の酷評より翌'19 年 1 月に 'The Eve of St. Agnes' が書かれる迄の半年間は、実質的な詩作はほとんどなく、一見沈滞の期間でありましたが、実際にはこの期間は飛躍の前の暗中模索の時期であり、この長期にわたる弟 Tom の病床での孤独の瞑想の中で、Keats は次第に自己の詩の方向について、一つの光明を見出し始めていました。弟 Tom の死を目前にした 10 月 14 日付の手紙で、Keats は内に Poetic resources をいっぱい感じて、詩的興奮にかられ、彼にしてはめずらしく大胆に、'I think I shall be among the English Poets after my death' と自信のほどをみせ、又、純粹な詩的喜びの為に、'I hope I shall never marry' とさえ云っています。この詩的な気分の高まりは、12 月 1 日、彼が母性的な愛情をさえ抱いていた弟 Tom の死により、一時的に中断されますが、再び驚くべきほどの早さで詩人の心を捉え、'19 年に一気にその花を咲かせる事になります。そして、'The Eve of St. Agnes' が、その最初の、かつ最も充実した結晶でした。

さて、'18 年の 12 月 16 日から翌'19 年 1 月 4 日にかけての、アメリカにいる弟 George にあてた Journal Letters は、'The Eve of St. Agnes' が生まれる迄の詩人が心の動きを、多くの点で語っています。Keats は 12 月 16 日付の手紙で、"長い間、弟 Tom の病気とその死によって、詩作が中断され、又、詩を作る気分になかった"と云っていますが、翌 17 日付の手紙では、"自分は、詩を作っている時以外は、気分が安らがないという永遠の絆に縛られているので、今後は詩作に励げもうと思う"と云っています。そして 12 月 31 日付の手紙では、次の様なはっきりとした言明をしています。

I never can feel certain of any truth but from a clear
Perception of its Beauty.

H. W. Garrod は、Keats のこの言明は、彼がこれ迄落っついた哲学

的な epic を断念して、彼生来の感覚による詩に戻った事を示している。と云っていますが、Keats のその後の努力を考えると、この言葉が単に、Garrod によれば誤った方向である^① Philosophic な方向を Keats が断念した事を意味しているとは考えられません。たしかに、Keats は自己の詩の哲学的な深さの欠如を痛感して、その為、彼本来の感覚でとらえた想像の世界に甘んじている事に不安を感じ、いらだたしい焦燥感を味わっていましたが、詩の本質についての考え方、即ち、“すべての真実は、その美の把握に於いてのみなされる” という持論については、こうした Dilemma の中にあっても、一度として疑いを持った事はありませんでした。従って、上述の言明によって、Keats が再び感覚に戻ったという事はないのです。ただ、この時迄の Keats は、まだ自己の詩の方向について、はっきりとした確信が持てず、sense か、Philosophy か、あるいは本能か、理性かという二者択一の境地にあって苦しんでおり、その為に、持論を自信をもって打出す事ができないでいました。それが弟 Tom の死後、今迄はぼんやりと把握していたものを、ようやくはっきりとした形でつかみ始めていたのです。即ち、二者のうちいずれか一方を選ばなければならないという誤った Dilemma から脱出して、2つの相反する本能を、融合、調和させる方向に自己の詩の方向を見出し、そのすぐれた手本を Shakespeare に見出していました。Keats は Shakespeare に対しては、早くから満腔の敬意を抱いていましたが、12月31日付の手紙では、とりわけ深い感動を受けている事を述べて、Shakespeare 文学のあふれるロマンスと優しい感情、そして、想像の余地を残しながら、グロテスクなものから一気により高次の調和美を生み出す技に感嘆しています。たしかに、Keats がようやくつかんだ方向は、Shakespeare の調和の世界、現実と想像の世界が一体となった、密度の高い想像の世界に他なりません。そして、自己の詩の方向に対して、一つの確信を持ち得た事が、Keats をして、‘I never can feel certain of any truth but from a clear perception of its Beauty’ という彼の持論を、ここで明確に表明させたものと考えられます。

さて、約半年にわたる瞑想の期間を打破り、'19年の飛躍への契機となったものに、2つの理由があげられます。一つは、愛する弟 Tom の死

後、急激に表面化した Fanny Branne に対する恋であります。Keats が Fanny に会った期日は明確にはわかりませんが、11月頃と推定され、12月1日の弟 Tom の死を契機に、それが急激に深められた事は確かです。J. M. Marryは、クリスマスの日には、Keats は Fanny と婚約したと云っています^⑤。ともあれ、Keats は漫然と恋を楽しむような性格ではなく、真剣に Fanny との実生活を考えていました。従って、この Fanny への恋は Keats に自身の社会に於ける不安定な立場を痛切に感じさせ、社会から遊離した孤独の瞑想からきて、実際に活動しなければならぬ事を実感させたと思われます。この点で、'The Eve of St. Agnes' が多くの批評家が指摘するように、Keats の Fanny Brawne に対する恋の理想的実現の姿をうたったものである事に、まちがいのない事です。それが同時に、詩人の現実に対して立向かおうとする意欲を反映している事を見逃してはなりません。この恋を実現させたいという切望は、自身の健康の衰弱の為に実質的にそれが不可能である事を悟った、9月のこの詩の改作に於いて更に強く反映される事になります。

さて、今一つ、詩人の心のもやを晴らし、'19年の飛躍への契機をなしたものに、Keats に与えた Hazlitt の影響をあげたいと思います。Keats は12月14日、Hazlittを訪ね、まだ未発表の 'On the English Comic Writers' と題する講義の原稿を貸りてかえっていますが、その中の 'English Novelists' と題する講義中の Godwin についての考察は、当時の Keats にとって一つの啓示となったとおもわれます。Keats がその理論的な面で、Hazlitt の影響を強く受けている事は、批評家の指摘する所ですが、たしかにこの場合は、その事が云えると思われまゝす。'19年1月2日付の弟 George にあてた手紙に於いて、Keats が2pにまたがって、長々と Hazlitt の Godwin についての考察を引用したのは、それが当時の Keats の心にあった自己認識、自己の詩についての方向やその方法を、実面的確に代弁していたからに他なりません。まず Godwin の小説、'St. Leon' の主人公、St. Leon の性格について、'He is a limb torn off from Society' といい、又、'He lives in the solitude of his own breast' と云っていますが、この St. Leon の孤独感、社会的不安定感は、当時の Keats の痛切な実感でありました、又、ロマンサーとしての Godwin の手法について次のように述べています。

. . . the other owes every thing to internal conception and contemplation of the possible workings of the human Mind. There is little Knowledge of the world, little variety,

この外的事実の観察によらない、内的思考による事物の把握の手法は、実際体験の少ない、そして人間の心に最大の関心をよせながらも、現実の社会とはどうしても妥協できなかった Keats が human affair を取扱う時、必然的にとらざるを得ない手法であり、この事が、彼の詩、とりわけ人間を中心とした物語詩や Drama を、きわめて象徴的な、かつ、想像色の濃いものとしている大きな原因となっています。さて、Hazlitt の次の一節は、正に当時の Keats がようやくはっきりとつかんでいた彼の未来の詩の方向であり、Keats が 'The Eve of St. Agnes' に於いて試み、成功したと思われるものです。

. . . the effect both in Caleb Williams and St. Leon, is entirely made out. . . . by intense and patient study of human heart, and by *an imagination projecting itself into certain situations, and capable of working up its imaginary feelings to the height of reality.* (*Italics is mine*)

Keats はその高い美の理念の為に、彼の美が生きづく事のできる想像の世界から、本能的にどうしても離れる事ができなかったのですから、彼生来の世界に異質のものを加えて、その原形を変化させていくという方法によってではなく、自身の世界に異質のものを完全に吸収して、その原形を何ら変化させる事なく、彼生来の世界をより深めていく方向にその活路を見出したのは当然であります。想像の世界を、単なる弱々しい想像の世界に終らせず、現実の感情に対処できるだけの力強い現実感と抱活力をもった intense (密度の高い) な想像の世界を生み出す事により Keats は自己の詩の理念を確信をもって打出し、現実に向向かおうとしたと考えられます。

先にも云った通り、Keats は秋頃から次第に自己の詩の方向について、確信を持始めていましたが、それをはっきりと外に表明できないでいまし

た。それが14日、Hazlittを訪ずれて、上述の Godwin についての考察を目にするに及んで、はっきりと実感として把握できたのではないでしょう。それが17日の力強い 'I must again begin with my poetry' という言葉となって表われ、更に31日の 'I never can feel certain of any truth but from a clear perception of its Beauty' という、自己の理念に対する新たな確信の言葉となってあらわれたものと思われます。今やその方向をつかみ、確信を持った Keats は、長い沈黙を破り、1月2日付の手紙の中で、文字通り空想を自由にはばたかせたいという希望をうたった、'Ever let the fancy roam' を、続いて、詩人としての使命と希望をはっきりと反映した 'Bards of passion and of Mirth' を copy しています。現実を乗り越えて、天上に魂を得、更にその美しい魂が、生ける者の知すいとして、地上にも再び生きるという詩人の魂の2重の不滅性を高らかにうたったこの Ode は、その根本思想に於いて 'The Eve of St. Agnes' の原形をなしており、後者の天上へと飛しようとする恋人達の美しい姿は、その不滅性に於いて、真実なる詩人の魂と同一であります。以上の事からみても、The 'Eve of St. Agnes' が単に時を得た美しい romance ではなく、Keats が自己の美の理念を確信を持って展開した作品であり、その詩の方向を打出したものである事は明らかであります。又、Keats が当時光明をみい出しつつあった事は、この詩を書く直前に、友人の Haydon にあった次の手紙からもうかがう事ができます。

I see by little and little more of what is to be done and
how it is to be done, should I ever be able to do it _____

On my soul there should be some reward for that continual 'agonie annuiyuse'.

_____ IO (?) January 1819, To Haydon _____

'The Eve of St. Agnes' は、彼の詩の方向と理念を明確に示した作品として、正に Keats の長い苦悩に対する報いであつたといえましょう。

更に、この詩を成功させた一因として、従来にない詩人の現実に対する挑戦意欲があげられますが、この事は、作中人物の現実感をもった人間的な感情にも、又、愛を扱った Keats の全詩作中、この詩の主人公のみが

mortal な存在であり、しかもそ高らかな勝利に終っている点にもあらわれていますし、更に、この詩の完成直後に妹の Fanny にあてた 次の忠告の中にも、‘The Eve of St. Agnes’ 執筆当時の、Keats の建設的な気分をくみとる事ができます。

The time will come when you will be more pleased with
Life _____ look forward to that time and, though it may
appear a trifle, be careful not to let the idle and retired
Life you lead fix any awkward habit or behaviour on
you _____

_____ 11 February 1819, To Fanny Keats _____

妹の Fanny は16才で、当時は後見人の Abbey 氏にあづけられており、決して idle で retired な生活をしていただけではありませんでした。明らかに、この忠告は、Keats が自身に対して行ったものであり、従来の引きこもった生活を脱皮して、未来に目を転じようとしている詩人の気持を、そのまま妹に送ったものと思われます。

Keats の精神的な発展の過程は、一直線となって進んだのではなく、ある時は進み、又後退し、又沈滞する、といったものでしたが、‘The Eve of St. Agnes’ 当時の Keats は、少なくとも希望にもえ、何を、どうすべきか、という事をはっきりとつかみ、確信をもって自己の詩の世界を展開することができた期間でした。しかも、Keats のその後の進展の過程をみれば、この詩が頂点ではなかったかと思われます。

(2)

‘19年の年頭には一時的に光の中にあつた、Keats でしたが、その後のどの痛みの悪化や、彼にとっては最もいまわしい金銭的な気苦労等から再び沈滞状態に落入り、3月には、すでに次のようにうたっています。

Verse, fame and Beauty are intense indeed
But Death intenser——Death is Life's high mead.
(‘Why did I laugh tonight?’, 19 March 1819, To The G.
Keates)

勿論、keats は eternal poetry に対する闘いをやめたわけではありませんが、この詩に見えた *Death* という語は、以後、keats から離れなくなり、死ぬ迄、つきまとう *Indolence* の中で、決意と沈滞の間をさまよい、実質的には、ついに立上る事ができませんでした。たしかに '19年には、'The Eve of St. Agnes' 以後 'Ode to a Nightingale' や 'Ode on an Grecian Urn' を始めとする数々のすぐれた Odes や、バラッド、'La Belle Dame Sans Merci'、物語詩 'Lamia'、更には断篇に終わった 'The Fall of Hyperion'；又、劇詩、'Otho the Great' 等々、keats の作品中の秀作のほとんどが次々と生み出され、一見 Golden period の観を呈していますが、今ふれましたように、実際には、詩人の心は 'The Eve of St. Agnes' の頃の自信を失い、再び一層暗いものに包まれ、肉体的な衰弱と共にその精神も次第に病的となっていました。Keats の詩の世界は、'The Eve of St. Agnes' の力強く、輝かしい美しさを失い、'Lamia' の後退した暗い美しさへと変っていきます。又、健康の悪化と同時に、Keats は次第に現実に対して立向かおうとする意欲を失い、同時に社会の大衆に対する嫌惡の念をつのらせて、理性の声とはうらはらに、想像的色彩を濃くし、その世界は、抱活力と力強さを欠いた夢想的なものとなっていきます。傑作といわれる 'Ode to a Nightingale' にしても、'La Belle Dame Sans Merci' にしても、Keats の想像の世界は、'The Eve of St. Agnes' の intensity を持続できず、破綻をきたしており、精神的な後退を暴露しています。

7月から9月にかけて 'Lamia' を執筆中の Keats の手紙には、die とか、death の字が頻繁にみられ、もはや詩人の心を占めるのは、詩の為の詩、純粋に自身の為の詩、のみであり、詩の為には、もはや Love of gloomy に落入ることも、社会から遊離する事も、意に介していません。詩は唯一の生き甲斐であると同時に、唯一の逃避の場となっていました。この頃には、keats ははっきりと 'Beauty is truth' という自己の理念と、現実社会に於ける truth との間に、大きな disparity のある事を悟とり、本能的にはますます強く自己の世界に執着し、それを強く肯定しながらも、理性の上ではその敗北を認め、この地上の真理が勝利を得る事を認めていました。'Lamia' はこうした当時の詩人の心理的な分裂と、自信のなさを、そのまま反映しており、keats 自身、その読者に訴える力

を高く評価し、又、従来にない ‘healthy deliberation’ をなした、としている快心の作ではありますが、‘The Eve of St. Agnes’ に於いて全面的に打出した ‘Beauty is truth’ という理念を力強く打出す事はできず、理性の上からは Apollonins の勝利を認めながらも、全篇を流れるものは、詩人の Lamia の世界に対する強い愛着と肯定であるという主題の分裂をきたしています。結局、Keats は ‘Lamia’ に於いて、Apollonius の否定的な性格設定により、その勝利をむなしいものとし、終末の結果とは逆に、全体の効果としては一応自身の想像の世界を打出す事に成功してはいますが、‘The Eve of St. Agnes’ にみられる力強さと統一性を欠き、その想像の世界は現実感の乏しい、弱々しいものとなっています。残された問題は、Keats が Apollonins のむなしい勝利により、逆に前面に打出した彼の想像の世界を、このように現実界に於いては敗退せざるを得ないような弱々しいものとしてではなく、いかにして力強い肯定の形で展開させるかという事にあり、それは又彼の未来の詩の方向につながっています。

Keats は3篇の物語詩の中で、‘Lamia’ に対してのみ一応の満足を与えています。今みてきましたように、‘Lamia’ は Keats の詩全体の流れの中にあっては一步後退した作品であり、又、現実に対して立向かおうとする気力が欠如している点に於いても、‘The Eve of St. Agnes’ に比して一步後退したものです。Keats 自身この後退に気づいたに相異なく、その事は、彼がその出来ばえに於いては ‘Lamia’ を高く評価しながらも、彼の未来の詩の下地として、先の ‘The Eve of St. Agnes’ を選んだ事にうかがえます。9月に ‘Lamia’ 完成後、Keats は’18年以来ずっと頭を悩ませていた、‘Hyperion’ の詩作に再びとりかかります。‘Hyperion’ は Keats がその eternal poetry に対する Vision を託したものでしたが、この’19年秋の ‘The Fall of Hyperion’ も再び挫せつし、この未完の詩をもって Keats の創作活動は、一応の終止符をうつこととなります。

さて、大望をかけた ‘The Fall of Hyperion’ は断片に終り、詩人の未来の詩にかけた人道的な抱負と詩人としての強い自覚を表明するに終りましたが、詩に対する努力は最後まで続けられました。それを最もよく反映しているのが、‘The Fall of Hyperion’ とほとんど時を同じくして行

われた 'The Eve of St. Agnes' の改作であります。Keats は、この9月の改作に於いてこの作品にかけた始めの意図を更に強め、作中人物の感情や行為に一層の現実感を持たせてその想像の世界の密度をより深め、又、自身の美の image の象徴である恋人達の天上界への飛翔の姿を、地上の人間の醜くい死と残酷なまでにあざやかに対象させる事によって、彼自身の想像の世界を積極的に肯定し、'Beauty is truth' という理念を全面的に強く打出しました。

Keats が 'The Eve of St. Agnes' に強い愛着をもち、本能的にこの詩の中に、未来の詩の素地をみい出していた事は、詩について燥焦感が頂点に達した感ある11月17日付手紙に於いて明らかであります。

I have come to determination not to publish any thing I have now ready written; but for all that to publish a Poem before long and that I hope to make a fine one. As the marvellous is the most enticing and the surest guarantee of harmonious numbers I have been endeavouring to persuade myself to untether Fancy and let her manage for herself _____ I and myself cannot agree about this at all. Wonders are no wonders to me. I am more at home amongst Men and women . . . The little dramatic skill I may as yet have however badly it might show in a Drama would I think be sufficient for a Poem _____ I wish to diffuse the colouring of st. Agnes eve throughout a Poem in which Character and Sentiment would be the figures to such drapery _____ Two or three such Poems . . . would nerve me up to the writing of a few fine plays _____ my greatest ambition _____ when I do feel ambitious.

_____ 17 November 1819, To John Taylor _____

この手紙に於いて明らかな如く、人間の心の詩人としての Keats の大望は、すぐれた劇曲を書く事にあり、その下地として 'The Eve of St. Agnes'

の性格と色彩をもつ詩を選んだという事は、Keats がこの作品の力強さと前進的な姿勢の中に未来の方向を見出していたと云ってよいでしょう。結局、Keats はその美に対する理念から、理性本能に苦しみながらも、その想像的色彩を弱める事はできず、彼生来の想像の世界に、人生の諸相を深く投入することによりその世界を現実の域に迄高め、その中で 'Beauty is truth' の理念を、すべてを抱括する divine truth として打出す以外に道がなかったものと思われまゝ。この点で '19年の年頭に新たな意欲のもとに書かれ、更に9月に改作され、'20年の出版まぎわ迄 Keats がその一句一句の推稿にあたつた 'The Eve of St. Agnes' は、弱々しい面を残してはいますが、Keats の期待にそうものをもっており、この作品以外には実質的に彼の意図を実現したものがない事からも、この詩は Keats の詩全体の頂点をなすものであり、同時に又、彼の未来の詩への出発点をなす意義深い作品であると考えられます。

(完)

(註)

- (1) Sidney Colvin, *Keats* (Macmillans P. L.) P.60
- (2) 'a miserable and mighty poet of the human heart'
- (3) H. W. Garrod, *Keats* (Oxford, 2nd Edition) P.51
- (4) 同 P.56
- (5) J. M. Murry, *Keats* (The Noonday Press, 2nd Edition, 1962) cf. p.34
- (6) H. E. Rollins, Edited by, *The Letters of John Keats*, vol.2, P.24の註を参照.
- (7) Kenneth Muir, Edited by, *John Keats, A Reassessment*, chapter 9を参照.

なお、ここで引用した Keats の手紙は、H. E. Rollins 編集による *The Letters of John Keats*, (2 volumes, Harvard University press, 1958) を使用した。